

玄関にて

オレンジの風が息をしている
透明な水彩に沈んでいる景色
きしむ音
響く音
心地よく揺れている道端の木々

一瞬の静けさの向こうから
電車の遠ざかる音が渡ってくる
そして余韻の中から浮き出る
虫たちの音色
白い半月が浮かんでいる

僕は思い出した
「普通なんて必要ないのさ」
自分自身の言葉として
また、社会の合言葉として信じられ
そして、現在が創られた
抗いがたい鎖に縛られた——

祈りの時が訪れたのだ
伝えるべきものは
もはや寄せ集めただけの「知」ではない
他者に委ねることができぬもの——
そういうものとしての意思
バリエーションではない無限

鉛筆を握ってみる
指は覚えていた
待ち受けていたかのように

まだるっこしいキーボードなんかではなく
白いノートへまっすぐに向かう流れ
そこに自分が居る

隠喩ではない夕暮れが訪れつつある
普く覆い包むがいい
我々に妥協を強いることで成立する社会
そんなものに飼い馴らされる日々など——
窒息してしまうほどに
強く締め上げてしまえ

愚かしさと高貴さが重複している
偽善者たるオレンジの斜光
自由を手に入れることなど不可能だ
昨日の呪縛から逃れることはできても
明日の呪縛が待ち構えている

嘘吐きの風が吹いてきた
付き合ってもいいが
美しさを運び続けることが条件だ
聖俗相殺の結果としてではない——
ひたすら透明な美しさを運んで来い

焦燥に満ち満ちた静寂が喘いでいる
一日が終わり
また一日が来るだろう
私の中で息づく生命——
それを包む美しさを運んで来い

(2013.9.30)